

## 今週のメニュー

## ■トピックス

◇日本は雪国なのか その1

## ■随想

◇ららら、プラスチック (16) 人工芝と苦い思い出

元 日本プラスチック工業連盟 専務理事 岸村 小太郎

## ■トピックス

◇日本は雪国なのか その1

## 1. 大雪の連休

## 2. 日本の半分は豪雪地帯

## 3. 豪雪の歴史と最近の状況

## 4. 北越雪譜の世界 (次号)

## 5. 社会的インフラ強化への貢献 (次号)

## 1. 大雪の連休

2月の天皇誕生日を挟んだ三連休は、冬型の気圧配置で東北から中国地方の日本海側を中心に断続的に雪が降り、平年を大きく上回る大雪となりました。24日の各地（気象庁の観測点の記録）の日最深積雪は次のとおりです（[こちらのリンク](#)（2/3位の日最深積雪参照）から直近の情報が確認できます）。

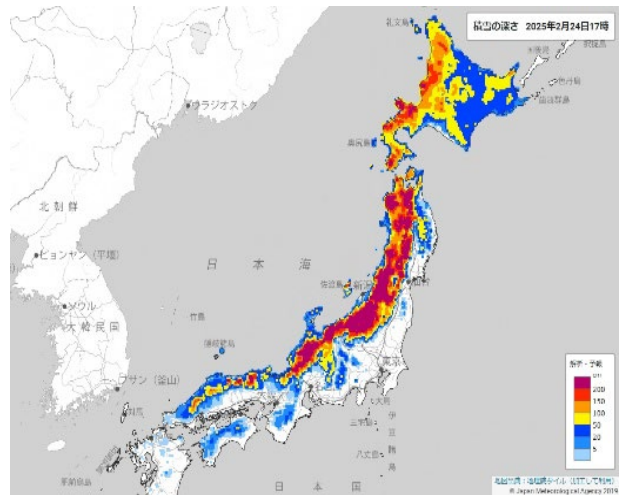
連日、テレビのニュースでも一夜にして家などの建物の屋根や道路に降り積もった雪の塊や雪下ろしや雪かきをされている方々の姿が報道されていました。また、2月4日からの大雪について、2月7日に新潟県の1町に災害救助法の適用が決定されたのをはじめ2月12日までに合計福島県で3市11町5村、新潟県は5市2町への適用が決定されています。加えて2月20日と25日には、あらたに2月17日からの大雪に対して新潟市の1市及び青森県6市3町に適用されることがそれぞれ発表されています。災害救助法は、災害に対して国が地方公共団体、日本赤十字社その他団体及び国民の協力の下に、応急的に必要な救助を行い、被災者の保護と社会秩序の保全を図ることを目的としています。1995年度（平成7年度）以降の[適用実績](#)を見ると、大雪については令和に入ってからほぼ2年に一度発令されています。

表1 各地の日最新積雪10位（気象庁HPから作成）

日最深積雪(5cm以上のみ)2025年2月24日					
順位	都道府県	市町村	地点	観測値	
				cm	時分
1	青森県	青森市	酸ヶ湯（スカユ）	503	2:00
2	新潟県	魚沼市	守門（スモン）	387	19:00
3	新潟県	中魚沼郡津南町	津南（ツナン）	385	21:00
4	山形県	最上郡大蔵村	肘折（ヒジオリ）	333	4:00
5	福島県	南会津郡只見町	只見（タダミ）	318	4:00
6	山形県	西村山郡西川町	大井沢（オオイサワ）	312	01:00
7	新潟県	十日町市	十日町（トオカマチ）	300	24:00
8	新潟県	南魚沼郡湯沢町	湯沢（ユザワ）	287	21:00
9	新潟県	上越市	安塚（ヤスツカ）	284	06:00
10	群馬県	利根郡みなかみ町	藤原（フジワラ）	271	1:00

図1 ([こちら](#)のリンクから直近の図が確認できます) は、2月24日17時の積雪の深さを表しています。北海道から東北、北陸、中国地方の日本海側のほぼすべてに積雪があり、200cmを超える地域がかなりの面積を占めていることがわかります。

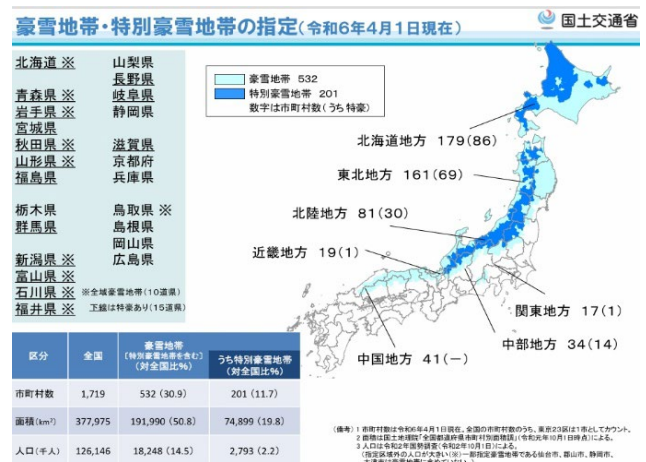
図1 2025年2月24日 積雪深地図 (気象庁 HP より)



## 2. 日本の半分は豪雪地帯

図2 (リンク先は[こちら](#)参照) は、2024年4月1日現在の豪雪地帯・特別豪雪地帯に指定されている地域です。これを見ると日本の国土の面積の50%以上、市町村数で30%以上を占めています。人口でいえば、約15%に満たないのですが、世界の豪雪地帯に比べたら人口稠密な地域となっています。この図2と先程の図1を見比べると、ほぼ重なっています。つまり、年によって雪の多い少ないはあるものの、今回のような大雪は、日本にとって決して珍しい事象ではなく、ほぼ国土の半分が大きな影響を被ることがいつ起こってもおかしくないといえます。

図2 豪雪地帯・特別豪雪地帯の指定 (国土交通省 HP より)



なお、「豪雪地帯」とは、豪雪地帯対策特別措置法第2条によって指定されるもので、「積雪積算値」の平年の値が50cm以上の「豪雪地域」において、主要な交通機関が通っていたり、自治体における「豪雪地域」がある割合を超えたりなど、一定の要件を満たす場合に指定されるものです。また、「豪雪特別地域」はさらに雪が深く、しかも、交通や医療、財政など、雪による生活の支障が著しい地域が指定され、指定基準がより厳しく設定されています。

国土の約半分が豪雪地帯であり、ときにそれ以外の地域でも大雪に見舞われ、鉄道や道路などの交通インフラが混乱し、市民の社会生活に多大な影響が生じることを考えると、日本はまさに「雪国」といってもいいのかもしれませんが。

## 3. 豪雪の歴史と最近の状況

戦後、災害をもたらした気象事例というものが気象庁でまとめられています (リンクは[こちら](#)) これを大雪についてピックアップしたものが表2です。昭和63年までとそれ以降で抽出した基準が異なりますので (表下の注記参照)、単純に比較することはできませんが、少なくとも平成に入ってから、「平成18年豪雪」までは被害規模や社会的に影響の高い大雪はなかったものと考えられます。その点について、昔から豪雪地帯として有名な新潟県の観測ポイントである十日町における「最大積雪深」の推移 (1962~2022年までの60年間) をグラフにしたのが、次のグラフ1です。

表 2 災害をもたらした気象事例（気象庁 HP から作成）

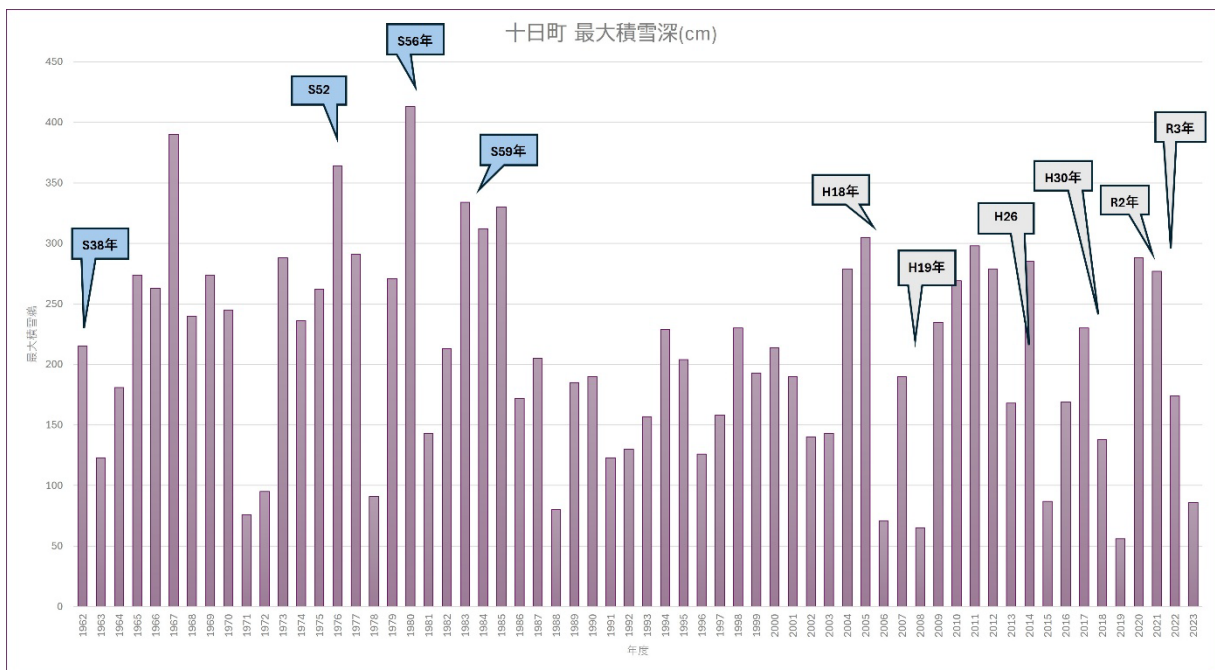
令和3年（2021年）		
<a href="#">発達した低気圧及び強い冬型の気圧配置に伴う大雪・暴風（速報）</a>	令和3年（2021年）1月7日～1月11日	北日本から西日本の日本海側を中心に広い範囲で大雪・暴風。北陸地方の平地で1メートルを超える積雪。秋田県などで停電発生。
令和2年（2020年）		
<a href="#">強い冬型の気圧配置による大雪（速報）</a>	令和2年（2020年）12月14日～12月21日	北日本から西日本の日本海側を中心に大雪。群馬県みなかみ町藤原で期間降雪量291センチ。関越道等で多数の車両の立ち往生が発生。
平成30年（2018年）		
<a href="#">強い冬型の気圧配置による大雪（速報）</a>	平成30年（2018年）2月3日～2月8日	北陸地方の平野部を中心に日本海側で大雪。
<a href="#">南岸低気圧及び強い冬型の気圧配置による大雪・暴風雪等（速報）</a>	平成30年（2018年）1月22日～1月27日	関東甲信地方や東北太平洋側の平野部で大雪。日本海側を中心に暴風雪。
平成26年（2014年）		
<a href="#">発達した低気圧による大雪・暴風雪（速報）</a>	平成26年（2014年）2月14日～2月19日	関東甲信、東北、北海道で大雪・暴風雪。
平成19年（2007年）		
<a href="#">低気圧による暴風、高波、大雪</a>	平成19年（2007年）1月6日～1月9日	西日本から北日本の広い範囲で暴風や高波および大雪。
平成17年（2005年）		
平成18年豪雪 ※	平成17年（2005年）12月～平成18年（2006年）3月	12月から1月上旬を中心に大雪、除雪中の事故等による甚大な被害。
昭和59年（1984年）		
昭和59年豪雪	昭和58年（1983年）12月～昭和59年（1984年）3月	太平洋側でも雪による被害が多発。
昭和56年（1981年）		
昭和56年豪雪	昭和55年（1980年）12月～昭和56年（1981年）3月	全国的に低温、大雪。
昭和52年（1977年）		
昭和52年豪雪	昭和51年（1976年）12月～昭和52年（1977年）2月	全国的に大雪。
昭和38年（1963年）		
昭和38年1月豪雪 ※	昭和37年（1962年）12月～昭和38年（1963年）2月	北陸地方を中心に大雪。

気象庁 災害をもたらした気象事例

[災害をもたらした気象事例（平成元年～本年）](#) 被害を総合的にみて規模の大きなもの、社会的な関心・影響が高いもの

[災害をもたらした気象事例（昭和20～63年）](#) 気象庁が命名した台風の事例および死者・行方不明者数が100名以上の風水害・雪害の事例

グラフ 1 十日町 最大積雪深（新潟県の [HPのデータ](#) からグラフ化）に気象庁の気象事例の年を追記



これをみると一目瞭然ですが、1980年代後半から2000年初頭まではそれまでと比べて積雪の量が少なくなっています。それが2000年以降、積雪の多い年が増えてきており、それとともにふたたび社会的に影響の高い災害をもたらすような気象事例がでてきています（1985年からの20年間0件が2005年から約20年間で6件）。2025年2月の第17回豪雪地帯対策分科会での資料によると、とくに最近の豪雪地帯の現状としては、①人口減少や高齢化が全国よりも進行している、②恒常的降雪による被害発生、気候変動の影響で短期集中的に発生、③雪害による死者数は増加傾向で、風水害に比べ大きく増加、④死亡事故の9割は除雪作業中、除雪作業中に亡くなった方の9割が65歳以上の高齢者、特に屋根からの転落や落雪による死亡事故が多発といったことが示されています。今年の大雪に関するニュースでも必ずといっていいほど、ご高齢の方々が雪下ろしや除雪をされていることが取り上げられていました。

(つづく)

## ■ 随想

### ◇ららら、プラスチック (16) 人工芝と苦い思い出

元 日本プラスチック工業連盟 専務理事 岸村 小太郎

昨年の12月、年の瀬も迫った土曜日に、都内で開催された「第10回川ごみサミット」に参加した。このイベントに参加するのは、2021年12月の第7回目以来。

川ごみサミットでは、全国の河川・海洋環境保全に取り組む市民団体や個人、行政担当者、民間事業者、研究者などの多様な主体との意見交換の場を設け、川ごみ問題の根本解決のための現状分析と流域保全再生の具体的方策の検討を深めることを目指している。（主催者のWebサイトから引用）

主催者の「全国川ごみネットワーク」は、（特定非営利活動法人）荒川クリーンエイドフォーラムと（一般社団法人）JEANが中心となり、2015年に任意団体としてスタートしている。この団体とは日本プラスチック工業連盟（プラ工連）時代からの付き合いで、川ごみサミットには第1回目から参加しており、第1回と第2回ではパネリストや講師を務め、プラ工連を退職した後も、地方での開催でない限り（出張旅費をどこにも請求できないので・・・）、都合が付く限りこのイベントに参加している。

今回のサミットでは、マイクロプラスチックの発生源として最近着目されている被覆肥料と人工芝の問題が取り上げられたが、ここでは人工芝の話題について紹介したい。ちなみに、人工芝にはポリエチレン、ポリプロピレンやポリアミドが使用されているようだ。

人工芝の問題についての取組みは、環境団体と環境省から紹介があり、そのポイントを以下に箇条書きした。

- ・一般社団法人ピリカが2019年度に実施した調査（アルバトロス・プロジェクト）において、12都道府県の河川や港湾100地点中、75地点で人工芝と見られるマイクロプラスチックが見つかった。
- ・ピリカによる2020年の国内調査では、120地点中112地点でマイクロプラスチック



が採取され、そのうち人工芝破片が23%（重量比）を占めていた。

- ・環境省は、マイクロプラスチック流出抑制の取組・技術に関して、関連事業者・団体との懇話会を開催しているが、2021年度から人工芝WGを設置し、リーフレット等普及啓発資料を作成している。
- ・環境省は2021年度に、人工芝の流出抑制策を含む「マイクロプラスチック削減に向けたグッド・プラクティス集」を作成している。
- ・2024年8月、「減プラスチック社会を実現するNGOネットワーク」および賛同36団体が、「スポーツ振興くじの助成に環境配慮を求める要望書」を文部科学大臣に提出した。



写真 樹脂ペレットと一緒に採取された緑色のプラ小片

(2013年8月荒川河川敷にて筆者撮影)

文科省が2001年11月に公表した「スポーツ振興投票の収益による助成の基本方針」では、「スポーツ施設の整備に係る助成」の対象として、「グラウンドの芝生化」が挙げられているが、上記の「要望書」では、これを助成対象から外すこと求めている。

要望書を提出したNGOネットワークには、前述のJEANや全国川ごみネットワークも名を連ねている。

なお、流出防止策を実施している施設でも、流出が確認されているとの報告もあった。

マイクロプラスチックとしての人工芝に関しては、ちょっと苦い思い出がある。

2016年頃だったろうか。プラ工連の事務所に警視庁の刑事が訪ねて来たことがある。某所でブルーシートに包まれた他殺体が発見され、遺体には緑色のプラスチック小片が付着していたという。殺害現場を特定するために、この小片が何であるかを知りたいとのことだった。この緑色のプラスチック小片は、私自身も荒川の河川敷で実施した樹脂ペレットの流出状況を調べた際に見つけているが（写真）、当時はそれが何か分からなかった。そして、刑事には「樹脂ペレットの製造工程では、熔融した樹脂をひも状に引いた“ストランド”をカットするが、工程が安定しない状態が出た細いストランドかも知れない」と答えた記憶がある。あれが人工芝だと分かったのは、それから数年後だった。その後、捜査結果がどうなったか不明だが、人工芝の問題を見聞きするたびに、「あの説明が、捜査方針を誤らせたのでないか」との想いに苛まれる。

話は変わるが、昨年11月、詩人の谷川俊太郎氏が亡くなった。彼の処女詩集「二十億光年の孤独」は、合唱曲（作曲；木下牧子）としても有名で、私も20年ほど前の演奏会で歌ったことがある。

先日、詩人の逝去を詠んだ俳句を目にしたので、紹介したい。ちなみに、「冴ゆる」は冬の季語。

二十億光年の彼方巨星冴ゆ / 林 木木

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)

※本メールマガジン上の文書・画像等の無断使用・転載を禁止します。



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601    ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <https://www.vec.gr.jp>    ■ E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)

---

---